

『敵討研屋辰蔵』考

出口逸平

はじめに

今回取り上げる小説『敵討研屋辰蔵』（伊沢孝雄編、臥龍軒南子閣）は、明治二十八（1895）年九月、大阪の此村欽英堂より出版された。文政十（1827）年讃岐で実際に起きた敵討に材をとった本作は、題名からわかる通り歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』⁽¹⁾で知られる、いわゆる「研辰もの」の一つである。町人が武士を殺して逃亡し、その町人を追いかけて武士が復讐したという異例の展開ゆえに、この敵討にはさまざまな噂や瓦版が飛び交い、明治に入っても小説や演劇で繰り返し取り上げられてきた。

こうした研辰ものの系譜の中で、本作はどのような位置にあるのか。何を典拠に、どのような工夫が施された作品なのか。先行作との比較を通して、いままで知られることのなかった本作の意義を探ってみたい。

1 事件と『敵討研屋辰蔵』

まずは現実に起きた敵討そのものを、関係者の手になる写本『綾南復讐記』『阿野郡南羽床下村敵討始末記』『羽床村復讐記事』『羽床下村敵討一件留』また片山家文書等の史料を参考にまとめておきたい⁽²⁾。

事の発端は文政六（1823）年八月にさかのぼる。江州膳所に住む刀研ぎ職人の辰蔵が、自らの妻と膳所藩の藩士平井市郎次を切り殺し、行方をくらます。その敵討のため、外記と九市郎の二人の弟は辰蔵を追って諸国を遍歴し、さまざまな艱難辛苦の末、ついに文政十年閏六月辰蔵郷里の讃州阿

野郡羽床村で復讐を果たしたというものである。

この事件は当時大いに評判を呼び、さっそく瓦版や芝居になり、相前後して『九十九神』や『羽床敵討』という実録体小説、さらには読本『絵本復讐千丈松』も書かれた。だがこれらはいずれも実録と呼ぶには、あまりにフィクションの要素が強い⁽³⁾。本作は登場人物や構成といった面で史実にかなり忠実であり、まさに実録体の名にふさわしい小説となっている。具体的に見ていくなら、『敵討研屋辰蔵』全三十七章は、まず殺人に至る背景を（一）～（四）で説明し、（五）で文政六年八月の殺人事件そのものを描く。続く（六）～（三一）で第二人による辰蔵探索の旅をさまざまなエピソードとともに記し、（三二）で文政十年閏六月の復讐の一部始終を事細かに描写し、あとは彼らが同年九月に帰国するまでを（三三）～（三七）で語るという、時系列に即した詳細な実録ものの体裁を備えている。

「世間に伝ふる物、街談巷説により、妄誕綺語黷しと為ず。余は其真実成る談話を是に著はし、児女の勸善の一端に為さんと欲せり」⁽⁴⁾という編者の意図は明確ではあるが、図版1の『敵討研屋辰蔵』刊記にある通り、編者伊沢孝雄（伊沢駒吉）も発行者此村庄助とともに大阪在住で、本作は純然たる大阪産の作物である。

同じく図版1の巻末目録から、欽英堂が当時多くの敵討物や実録物を出版していたことはわかるが、およそ70年前に讃岐の地で起きた敵討について、どうしてこれほどくわしい情報を編者は手に入れることができたのか。

その手がかりは、じつは先に上げた写本の中の一冊『綾南復讐記』にあった。

2 実録『綾南復讐記』との比較

『綾南復讐記』は高松松平家歴史資料(香川県立ミュージアム保管)のなかの『消暑漫筆』巻之六に収められている。当該資料のなかでは最も克明な事件記録であり、また平井兄弟らと直接応接した中村惟孝の証言を娘婿の片山克孝が、兄弟がまだ高松滞在中の同年八月の時点でまとめたという成立事情も、実録としての信憑性を高めている⁽⁵⁾。作品は中村惟孝・片山克孝・友安三冬の序文のあと、次の三部から構成されている。

核となるのは最初の『綾南復讐記』本文(三〇～三三〇)であり、辰蔵が殺人に至る経緯と当日の行動、さらに敵討を果たした平井兄弟が江州膳所に帰国するまでの複雑な交渉記録(高松藩対膳所藩、さらには幕府対高松藩の折衝)を載せている。分量的にも内容上も、中村惟孝が彼らと直接接触することになった閏六月以後の出来事が過半を占める。

第二は「附録対話の巻」(三三〇～三三三)と題され、打って変わって高松滞在中に平井外記から中村惟孝がじかに聞きだした、四年に及ぶ流浪の旅のエピソードがふんだんに盛り込まれている。

最後の「復讐記追加」(三三三～三三七)は、帰国後の礼状のやりとりなど後日談からなっている。

巻末の『敵討研屋辰蔵』年表で両者を比較すれば、この『綾南復讐記』こそ『敵討研屋辰蔵』の主要な典拠であることはすぐに見て取ることができよう。まず『綾南復讐記』本文から、殺人事件の背景、市郎次(本作では市郎治と表記)殺害の描写、そして四年後の平井兄弟の復讐をディテールを含め大胆に作中に取り込む一方、敵討以後の交渉の場面はかなり刈り込んでいる。そして辰蔵探索の旅の部分には、「附録対話の巻」で語られたエピソードを時系列に整理した上でほぼ取り込んでいる。本書の骨格は、『綾南復讐記』本文と「附録対話の巻」の記述によって出来上がっているといっても過言ではない。

その類似は構成やエピソードの材料のみならず、文章面にも及んでいる。たとえば(五)「研工辰蔵平井市郎治を害す

条」において殺害の場面はこう描かれる。

何心なく縁先に出て爪を切りながら「辰蔵よ。其刀剣は切れあちも覚束なき物なるぞ」と云ひければ、辰蔵は「何此刀剣が切れあちの覚束なき物か。汝日来我業を妨げ辱めしな」と云ふより早く市郎治を後ろより一刀に伐付けば、市郎治は「^あ喚」と叫び俯向に倒るるを、力に任せて又切込むに市郎治は息絶へり。祖母阿種伯母阿鹿は次間に在りて大に驚愕、「あれ狼藉」と呼ばれば、辰蔵阿鹿に一刀切つけ庭にとび下り塀を乗越し、後暗まして逃げ去りたり。(十三～十四頁)

『綾南復讐記』では「縁の辺に出て爪切して居たるを、辰蔵其刀を抜、後より一刀に斬く市郎次を殺害せり。其傍に市郎次祖母伯母など居合せしが、大に驚き『あなや』と呼んとせしが其儘返す刀にて伯母にも疵を負せ、晦跡して逃去りたり」(四〇)とある。これ以上の細かな比較は控えるが、本作が『綾南復讐記』にいかにも多くを負っているかは、この一例からも明らかであろう。

だが『敵討研屋辰蔵』の典拠は、『綾南復讐記』にとどまらない。第二の典拠と呼ぶべき作品が存在する。それが歌舞伎の『敵討高砂松』である。

3 歌舞伎『敵討高砂松』の影響

『敵討高砂松』は、敵討直後の文政十(1827)年九月にさっそく大坂筑後芝居で初演され、それ以降京阪地方を中心に幕末期で10回余り、明治期にはおよそ40回も上演されている。そこでは新たに御家騒動の枠組みが設定され、善悪両派の抗争の中で、辰蔵が半道敵(半分道化、半分敵役)の守山辰次として、平井兄弟は善玉比良井才次郎・唐崎九市郎として登場する。これほど上演を重ねた『敵討高砂松』ゆえに、台本は国会図書館本、早稲田大学演劇博物館本、阪急学園池田文庫本など数種類あり、相互の異同も少なくない。し

たがって伊沢孝雄がどの上演を参考にしたかは断定できないが、『敵討研屋辰蔵』のいくつかの場面は、明らかに歌舞伎『敵討高砂松』からヒントを得たものとなっている。

まず最初に目につくのは『敵討研屋辰蔵』の表紙絵(図版2)である。『敵討研屋辰蔵』(十四)「信濃の山中にて九市仇を認る条」で、九市郎が辰蔵に谷底に落とされる場面は、次のように書かれている。

此には棧道も非ずして太き綱を向ふの山際よりひきその綱には畚を釣り往來の人を是に乗せ渡せり。其綱を曳的の小家に九市郎は行き「今示々の風体の男は此へ来らざりしや」と問へば、その男の答ふるに「其人は方今向ふへ渡して遣し」と云を聞て九市郎は悦び、其渡せる料をも聞ず金一分つかはし頼みければ、大に怡悦頓て九市郎を畚に乗せたり。九市郎向ふと見れば、辰蔵は未だ向ふの涯に居る故「早く渡せ」と苛立ば、「畏りし」と力のかぎりに送り綱を引ける時、辰蔵之を屹と見て大樹根元に結び付けたる大綱を切にかかるを、九市郎は見て大いに驚愕、「早く綱引け。危うし」と云ふ間に大綱ふつつと切れ、無慙九市は畚諸とも数丈の溪間に墜落にける。辰蔵は之を見て莞爾と咲ひて立ち去りける。(三十六頁)

『綾南復讐記』にこの場面は見当たらず、しかも作品本文では「未だ向ふの涯」に居て、そこで綱を切ったはずの辰蔵が、図版2では溪谷の中央で九市郎と斬りあう構図となっている。明らかに本文と食い違うこのような絵柄を表紙にもってきたのには、訳がある。おそらく歌舞伎『敵討高砂松』の「俱利伽羅峠の場」の次のシーンを当て込んでのことであつたにちがいない。

引き違えて、辰次、覆面頭巾着流し大小にて出て来る。

徳五 オオ、こなたは最前越した浪人どの、早う戻つてござんしたなう。

辰次 さればさ、大切なものを預けて置き、心急くまま失念した。早く元へ戻してくれ。

徳五 ハイ、サアサア乗つたり乗つたり。

辰次 よし よし。

ト乗る事。

徳五 なんぢや、どうしたか縄がたるんだやうな。

ト縄を結び直す。東の仮花道より以前の九市郎出る。

九市 ハア、清兵衛が云ひ聞かせし、獅子戻りといふは、この所ぢやなあ。

柿六 アイ、昔は畚で引いたげな。危ないに依つて只今は籠で越しますよ。

九市 ムウ、して価は何程ぢや。

柿六 ハイ、二四文でござりますが、お侍と御出家は何処でも只越しますわいなう。

九市 イヤ、さうではない。ソレ。

ト錢を渡す。(略)

柿六 徳五よ。今度は両方から引き違ひぢや。

徳五 おつと、承知ぢや承知ぢや。

トよろしくあつて

へ命の藤綱蕩かづら、見下ろす谷は数千丈、猛虎の窺ひ毒蛇の口、危ふかりける。

トこの浄瑠璃にて両方より静かに引き違へ、よき所にて行き逢ふ。双方、顔を見合し

辰次 ヤア、おのれは。

九市 そちは。

ト辰次、抜き打ちに九市郎の乗りし籠を切り落す。九市郎は谷間に落ちる。辰次は手早く東の方に渡る⁽⁶⁾。

歌舞伎では双方が舞台中央で「顔を見合せ」、辰次が「抜き打ちに九市郎の乗りし籠を切り落す」とある。『敵討研屋辰蔵』は、まさにこの『敵討高砂松』のハイライトシーンを表紙に描いたのである。

歌舞伎『敵討高砂松』の影響は、ほかの場面にもみられる。たとえば(十六)「文龍等蟠龍を害せんと熊本屋に来る条」では悪僧たちに宿屋を取り囲まれた蟠龍(外記)が、暗闇にまぎれて窮地を脱する場面がある。

脇差を直利とぬきてむね打に文龍が頭を打ち、返す刀に行燈の油皿を確と打ば燈火消て真闇り。文龍等は「是は」と驚愕身構する其処へ蟠龍火鉢を抛つけ抛つけ、悪徒共が狼狽廻れる其ひまに蟠龍は前栽に下り、堀をのり越し、長窪の方へ遁走せり。文龍始め悪徒等は蟠龍が逃しとは露知らず、脇差ぬきつれ切つて廻るに、咫尺も分たぬ暗り故同士うちに負傷と成りける(四十頁)。

これは直接には『綾南復讐記』の「附録対話の巻」の記述を受けてはいるが、同時に『敵討高砂松』の「吾妻屋の場」、特に暗闇での善玉平井兄弟の同士討ち、悪玉辰次の遁走の場面と関連している⁽⁷⁾。すなわち本作は『敵討高砂松』の善悪の役柄を逆転させつつ、コミカルなすれ違いを受け継いでいるのである。

また(十)「出雲屋処女阿延九市に恋慕の条」で出雲屋主人の娘阿延が、手代にやつした九市郎に切々と恋情を訴える場面は、『敵討高砂松』「志賀山狩倉の場」における夕照姫と家臣植田志津馬の関係を連想させる。

こうして歌舞伎『敵討高砂松』の影響を探ってみれば、『敵討高砂松』は『綾南復讐記』の「附録対話の巻」と同じく、辰蔵探索の旅を彩るエピソードの素材源として本作に活用されたことがわかる。

4 『敵討研屋辰蔵』の意義と問題点

『敵討研屋辰蔵』が写本『綾南復讐記』本文部分をストーリーの軸に据え、そこに『綾南復讐記』「附録対話の巻」と歌舞伎『敵討高砂松』の二つから多彩な旅のエピソードを受け継いで出来上がった作品であることをみてきた。いいかえれば実録『綾南復讐記』の記録性や細部のリアルさ、歌舞伎『敵討高砂松』のもつ娯楽的な笑いや恋の楽しみ、この両方を併せ持った作品として本作は構想されたと考えることができよう。

ただしこうした意図がうまく作品のかたちに乗ったかといえ

ば、結果は必ずしも満足のいく出来ではない。

たとえば実録のエピソードをできる限り取り込もうとする余り、本作は全体として冗漫に流れがちで、盛り上がり欠ける。とくに敵討以後の部分など、小説として必要だったかどうか、疑問が残る。

なにより問題なのは、『敵討研屋辰蔵』や写本『綾南復讐記』が事件の真相を意図的に隠している点だろう。つまり妻の殺害にまったく触れず、結局なぜ辰蔵が二人の人間を殺してしまったのか。その原因を伏せてしまったからである。

殺人事件直後羽床下村の大庄屋片山佐兵衛宛に、膳所藩盗賊方平井九郎次より送られた手紙にははっきりとこう記されている。「今度其御村方出生百姓倅辰蔵と申者、当時江州田上不動寺世話に而研商売をいたし居候処、女房に不義有之候処、右に付兩人共に差殺及切害候而逃去申候」と。辰蔵の妻と市郎次の「不義」の風聞は、『兎園小説拾遺』(曲亭馬琴)「京の友書状別紙、内々の事」にも「市郎次事、辰蔵に切害せられし訳は、もと色情の事にて、実はあまりよからぬ筋なり」と、すでに当時から流布している⁽⁸⁾。にもかかわらず本作(四)「市郎治不行状にて職録を失ひ九市家を継ぐ」は、市郎次が「躬行端正からざるに因り」職録を失ったことを描きながら、殺害の原因は「平井が鑑定に妨げられて偽り儲る事を失なひ、加之に市郎治に辱められし事の有と前年粟津にて打擲されし等、彼是と内心に市郎治を恨み居れり」として、「不義」は一切触れようとはしない。それは「文政十年南海の高松侯の封内に於て、復讐なした平井の二士。友愛の情武門の挙動、義全赳々たる。実に賞賛すべきなり」(一頁)という敵討賛美のテーマゆえであろうが、作品からリアリティの核を失わせることになった点は否めない。幕末の事件風俗記録『浮世の有様』(作者不詳)巻四「文政十年高松の仇討」が、殺人事件の原因について「いかに研屋思慮なき匹夫也とて、一通なるささき咄しのみにて殺すには及ぶまじき事なれども、かかる武辺に疎き馬鹿士なれば、実に不義の行有し事も斗りがたし。研屋とても恩人の事故、大抵の事ならば堪忍すべき事なるに、必ず止がたきゆへ有りぬる事なるべし」⁽⁹⁾と推測するのと比べてみても、一層その感を強くする。

おわりに

江戸期から続いてきた敵討賛美の傾向は、じつは明治末には次第に下火となる。本作は再版されず、歌舞伎『敵討高砂松』の上演も大正期に入ると六回程に減少し、昭和期にはほぼ途絶えてしまう。

大正期に入ると、今度は敵討への疑問・批判の眼をもった作品が数多く発表されるようになる。『三浦右衛門の最後』(1916年)、『ある敵討の話』(1917年)、『仇討三態』(1921年)といった菊池寛の一連の仇討小説や直木三十五の『仇討十種』(1924年)などは、まさに大正期の敵討批判の潮流の中軸となった。その延長線上に、谷崎潤一郎の戯曲『お国と五平』(1922年)や歌舞伎『研辰の討たれ』といった異色の敵討劇が生まれてくるのである。

こうした敵討賛美に対する疑問はすでに幕末でもみられたが⁽¹⁰⁾、反封建的あるいは人道的といったより「近代的」な視点から、あらためてこの事件も捉え直されることになる。こうした大正期の作品展開については、稿を改めて論じることにしたい。

なお香川県立ミュージアム学芸課の御厨義道氏には、高松松平家歴史資料(香川県立ミュージアム保管)閲覧に際し、多大なご助力をいただいた。

- (1) 『野田版 研辰の討たれ』は、野田秀樹(1955～)による『研辰の討たれ』(木村錦花原作、平田兼三郎脚色 1925年初演)のリメイク版であり、十八世中村勘三郎(1955～2012)主演で2001年8月に初演され、第一回朝日舞台芸術賞グランプリを受賞した。
- (2) 写本『綾南復讐記』は香川県立ミュージアム保管、写本『阿野郡南羽床下村敵討始末記』と写本『羽床村復讐記事』は鎌田共済会郷土博物館所蔵、写本『羽床下村敵討一件留』は香川県立文書館所蔵、片山家文書は田中義夫「江州膳所藩からの研辰の手配書—羽床下村片山家文書—」(『ことひら』45号 1990年11月)に翻刻が載る。なお読みやすさを考え、引用に際しては適時補正を施した。以下すべて同じ。
- (3) 『九十九神』(「象頭山靈験」の角書あり)や『羽床敵討』はいずれも敵討直後の文政十年、柳園種春作の読本『絵本復讐千丈松』は文政十一年の成立。各作品の梗概と評価は、延広真治「敵討読本三種『現過恩廻欄』『絵本復讐千丈松』『敵討飾磨褐布染』—浅田兄弟・研辰・山本りよ—」(『読本研究』第二輯上套 1988年6月)に詳しい。
- (4) 『敵討研屋辰蔵』の引用は、図版1・2を含めすべて国会図書館本による。なおいままでの調査で所在が確認できたのは、この国会図書館本のみである。
- (5) 片山克孝序文に「余が婦翁中村惟孝職隊将に在り。是に於いて二士及雲龍に接すること茲に数月、歎晤談笑殆ど旧より有るがごとし。(略)余の録する所修辭に乏しきといえども、直に婦翁の実話を筆め毫も虚誕を加えず」とある。
- (6) 『敵討高砂松』の引用は、国会図書館本を基にしたと思われる『日本戯曲全集』第四十九巻「近世大阪狂言集」(春陽堂 1933年3月)175～176頁による。
- (7) 『綾南復讐記』「附録対話の巻」では次のように描かれている。

外記「いかでか」と云ふままに刀を抜とも見えぬばかりに文龍が頭を棒打に撃して振廻す体にて燈を打倒し、燈消て咫尺も分ず。外記は携へ置たる火鉢を執て、悪徒等に投付又執てなげ付けば、悪徒等暗さはくらし、灰は目に入り大ひに擾乱し同士打す。外記は明け置きたる口より庭に飛び下り、束て置きたる荷物を掲げ路地口より出て、遁れ走ること四五丁ばかりにして(三五ウ～三六オ)一方『敵討高砂松』「吾妻屋の場」では辰次を見かけた才次郎が寝所に斬りこみ、あやうく兄の九市郎と同士討ちになる場面が描かれ、続いて

トこの時辰次、片手にて畳をまくり、水を下家に流す。これにて行燈消える。

才次 南無三、灯が。

九市 弟、ぬかるな。

才次 御油断あるな。(略)

辰次、忍び足にて、二階を下り、九市郎は二階へ上がる。辰次、又才次郎とすれ違ひ、門口へ出て

と、暗闇のなか辰次がまんまと宿屋から逃げだすというユーモラスなシーンがある(164頁)。

(8)『兎園小説拾遺』の引用は『日本隨筆大成』第二期第五卷(吉川弘文館 2007年)による。このほかにも「文政十年八月 杏隱老漁陸保記」とある「膳所平井氏復讐」(『懷郷座談』所収)では「平井市郎治、與辰蔵相親、一旦棄其親、而姦于其妻、無義也」と手厳しく評されている。

(9)『浮世の有様』の引用は『日本庶民生活史料集成』第11卷(三一書房 1970年)による。

(10)注9にあげた『浮世の有様』(作者不詳)巻四「文政十年高松の仇討」は、弟たちの敵討についても「かく手配りをよくして、町人一人を兄弟して討取し事、勝負其始めに顕然たれば、兄のかたきを討負せたるまでにて、ことごとく評判する程の事には非れども、敵討などいへる事、近来は至て希なる事ゆへ、専ら噂有し事なりし」ときわめて冷やかに事件を評している。

明 治 廿 八 年 九 月 十 日 印 刷
同 廿 八 年 九 月 十 六 日 發 行

所 藏 敵 討 研 屋 辰 蔵 堂

定 價 八 錢

版 權 所 有

發 行 者 此 村 庄 助
著 者 伊 澤 駒 吉
大 阪 市 南 區 櫻 葉 町 通 四 丁 目 百 七 十 五 番 屋 敷
大 阪 市 西 區 櫻 葉 町 通 一 丁 目 四 十 八 番 屋 敷
活 版 所 一 成 舎
大 阪 市 心 齋 橋 通 扇 屋 町 北 へ 入
東 京 市 日 本 橋 區 寶 山 町 三 丁 目 二 番 地

印 刷 者 瀨 戸 清 次 郎
賣 捌 者 此 村 欽 英 堂
書 肆 網 金 松 堂

書 肆 欽 英 堂 此 村 庄 助 出 版

大 阪 市 南 區 心 齋 橋 通 扇 屋 町 北 へ 入

○日清海陸實戰記	○曾呂利新左衛門傳
○時孫三次一代記	○弘法大師一代記
○肥後廻船下駄	○圓光大師具實傳
○諸禮式獨習指南	○親賢聖人一代記
○生花獨習指南	○運如上人一代記
○茶之湯獨習指南	○身延山利生記
○百人一首譯義	○淡屋辰五郎實記
○俳諧發句和文なひ	○假屋五兵衛實記
○新體交際用文	○佐野源左衛門傳
○新體奇麗果	○小倉隆助雙忠傳
○敵討榮禪寺馬場	○研屋辰蔵實記
○敵討大安寺提	○鈴木主水白糸實記
○増本鹿兒島軍記	○春色し物語
○三平松平長七郎傳	○於染久松浮名開書
	○於從傳兵衛實記
	○怪談系物語
	○匠左甚五郎傳
	○俠客五人男の傳
	○石川五右衛門實記
	○日本歌左衛門實記
	○天竺徳兵衛實記
	○梅木金助實記
	○稻葉小僧實記
	○小説英雄の月
	○小説劍聖娘
	○小説忍び車
	○淨瑠璃さわり大全
	○釋人共樂會
	○職藝軍歌
	○琴軍歌

図版1 『敵討研屋辰蔵』刊記・目録



図版2 『敵討研屋辰蔵』表紙

資料 『敵討研屋辰蔵』年表

年	月	『敵討研屋辰蔵』	典拠	
文政三	1820	四	(一)羽床村与之助父母と口角で故郷を脱走す	『綾南復讐記』(三ウ)
		五	(二)与之助畿内及び近国を経回する条	『綾南復讐記』(三ウ)
文政四	1821	九	(三)与之助田上不動寺に到る条 並 膳所藩士平井兄弟の事	『綾南復讐記』(三オ～ウ)(三十ウ)(三十一オ)
文政五	1822	春	(四)市郎治不行状にて職禄を失ひ九市家を継ぐ 並 与之助辰蔵と改名する条	『綾南復讐記』(三ウ～四オ)
文政六	1823	八	(五)研工辰蔵平井市郎治を害す条	『綾南復讐記』(四オ～ウ)
		九	(六)平井兄弟復讐出立の条 並 武内策治平井外記と復名す条	『綾南復讐記』(四ウ～五オ)

		(七)平井兄弟京師に出会又離れて敵を捜す条	『綾南復讐記』(五才)
	十二	(八)外記宮津に於て災害に遇ふ条	『綾南復讐記』(三十一才～三十二才)
		(九)九市郎大阪にて奉公する条	
文政七	1824	一～五	(十)出雲屋処女阿延九市に恋慕の条 並 九市郎大阪を立退き江府へ発す条
		『敵討高砂松』『志賀山狩倉の場』夕照姫と植田志津馬	
	一～秋	(十一)外記菓子売と姿をやつし諸国を遍歴す条	『綾南復讐記』(三十二才)
	十二	(十二)千住大橋にて九市郎熊五郎を辰蔵と思ひ止める条	
文政八	1825	三	(十三)外記虚無僧と成り諸国を巡る条 並 九市郎奥羽の地に入る
	四	(十四)信濃の山中にて九市仇を認る条	『敵討高砂松』『俱利伽羅峠の場』
		(十五)蟠龍諏訪の辺りにて苦礼僧文龍悦山を戒める条	『綾南復讐記』(三十四才～三十五才)
		(十六)文龍等蟠龍を害せんと熊本屋に来る条	『綾南復讐記』(三十五才～ウ)並びに『敵討高砂松』『吾妻屋の場』
		(十七)外記草津浴場にて辰蔵を認め捕逃す条々 並 外記不図も舎弟九市郎に偶ふ条	
		(十八)蟠龍和田熊本屋を訊問て親友残道に遇ふ条	『綾南復讐記』(三十六才～ウ)
	六	(十九)平井兄弟残道等飛騨の深山へ踏迷ふ条	『綾南復讐記』(三十二才～三十三才)
		(二十)蟠龍智謀を以て行路を知る条	『綾南復讐記』(三十三才～ウ)
	七～九	(二一)九市郎京都にて瘧疾と成り悩む条 並 蟠龍四国へ赴く条	
	十	(二二)音羽山にて九市郎文龍等と闘争ふ条 並 春嶽残道等来り悪僧を懲す条	
		(二三)九市郎虚無僧と成り鉄腸と号す条 並 雲龍靈巖履歴の事	『綾南復讐記』(三十七才～三十八才)
文政四	1821	秋	(二四)黒杭才治郎沢権太夫狩場に於て獲物を争う条
文政七	1824	春	(二五)吉敷豊十郎奴僕文平と闘争ふを才治郎仲裁す条
		(二六)二士一僕闘争の罪を蒙る条 並 才治郎憤怒て退去せんとする条	『綾南復讐記』(三十九才～四十才)
文政九	1826	十一	(二七)平井兄弟三原にて雲龍に遇ふ条 並 外記才治郎に宿意を語る条
文政十	1827	四～六	(二八)二士の頓作九市郎の瘧病を治す条
	閏六	(二九)平井粟屋西条にて神の告を蒙る条	『綾南復讐記』(三十七才～ウ)
		(三十)善通寺に於て兄弟不図仇の在家を聞く条	『綾南復讐記』(三十七才)(六才～七才)
		(三一)三士羽床に來りて辰蔵が隠栖を覗う条	『綾南復讐記』(七才～ウ)
		(三二)平井兄弟復讐の条	『綾南復讐記』(八才～九才)(十九才)
		(三三)羽床の村民等三士を捕へんとする条 並 検死の有司羽床村に来る条	『綾南復讐記』(八才～十一才)
	六～七	(三四)三士高松城市に至る条 並 高松より膳所へ復讐の次第通達の条	『綾南復讐記』(十一才～十七才)(十九才)(二十二才)
	七	(三五)膳所の藩士高松城市に来る条 並 榊原高橋等三士を伴ひ帰らんと為る条	『綾南復讐記』(十三才)(二十六才)
		(三六)膳所藩士粟屋才治郎を師ひて帰国の条	『綾南復讐記』(二十六才)
	八～十二	(三七)平井兄弟本国へ帰参旧主に仕ふる条 並 粟屋才治郎本多侯の臣となる条	『綾南復讐記』(二十七才～二十九才)